



県勢として初めて障スポに出場する、ソフトボール県代表メンバー

笑顔で生き生きプレー

「ナイスプレー」「打てー」。青森障スポフットボール(知的障害)本県代表のかけ声が、グラウンドに響いた。10、30代の男女10選手が団結し、同種目で県勢初の全国舞台に挑む。チームワークに手応えをつかんでいる平田宗靖監督(40)「児湯るびなす支援学校教諭」は「試合を心から楽しんでほしい。交流も含めた多くの経験を積み、来年の宮崎障スポにつなげたい」と見据える。

10人のうち経験者は4人。残りの6人は体験会で競技を始め、知的障害者チーム「サンシャインズ」などで力を付けた。年代に関係なくいつも支え合い、笑顔が絶えないメンバーたちを見ながら平田監督は「とにかく明るくて前向き」と笑みを浮かべる。

最年少の白石蒼空選手(18)「延岡しろやま支援学校高等部3年」は「未経験で不安だったが、周りが優しく教えてくれる。チームのために、もっとうまくやりたい」とほかにむ。これまで本県は人数不足でチームを組めなかったが、今年5月の九州予選に初出場し、抽選で青森切符をつかんだ。

仕事の都合などで、チームとして集まれるのは月に2回程度。限られた時間の中、健常者チームの胸を借りてレベルアップしてきた。8月下旬に都農町で行われた練習には延岡高と宮崎北高の女子ソフトボール部、同町の女子中学生チーム「ライジングスター」が参加した。メンバーは少人数では難しい走塁の動きを入念に確認。好プレーの度に「ナイス」「ミスが出て」「前を向こう」と声をかけ合い一体感を高めていた。センターから一番大きな声を送り続けた松垣香澄選手(23)「門川町」は「試合形式の練習は面白く、協力してくれる方々には感謝しかない。『楽しく笑顔で』を目標に、青森で勝利したい」と汗をぬぐった。



仲間の応援を背に、練習試合でヒットを放つ選手



ソフトボール県代表(知的障害)



青森障スポで初の全国舞台



宮崎公立大生が企画した体験会でボッチャを楽しむ参加者＝宮崎市



本年度はサッカーやバレーボールなど6競技で年6回程度開催。中高生ら健常者が練習や運営を支えることもあり、選手たちは地域との交流を深めながら競技力を高めている。「最初は軽い気持ちで参加したが、今は競技がすごく楽しい」と話すのはひなたフットソフトボールクラブの柳田竜聖主将(25)「門川町」。

宮崎障スポを契機に輪を広げる障害者スポーツ。長年普及に取り組み同協会の木下理チヤレンジドスポーツディレクター(71)は大会後も見据え、「多くの人を巻き込み、障害の有無に関係なくスポーツを楽しむ機会を高めていきたい」と力を込める。



「チャレンジドスポーツ」でフットソフトボールを楽しむ参加者＝日向市(県障がい者スポーツ協会提供)

競技普及・強化

体験会選手確保に成果

宮崎障スポに向け、県内で競技の普及・強化が進んでいる。成果を象徴する取り組みの一つが「チャレンジドスポーツ」。団体競技における選手確保や指導者育成を目的とした体験会で、今年で7年目を迎えた。これまでに代表選出すら難しかった競技が九州大会出場を果たすなど、地道な活動が実を結んでいる。

県や県障がい者スポーツ協会、各競技団体などが連携し、2020年にスタート。年に複数回の体験会を開催。6年前に体験会で競技を始め、今年6月の九州大会に出場した。「県外チームとの対戦は刺激になった。守備を強化して、宮崎大会で一つも多くの勝ちたい」と闘志を燃やす。

普及の動きは各地で広がっている。8月には宮崎公立大生が障スポの親子向け体験会を宮崎市で企画。日向市・日南高では出前授業が行われ、同校の生徒とくらしお支援学校日南校の生徒がフライングディスクなどを共に楽しんだ。